

月刊

AMDA

国際協力

Journal

11

NOVEMBER
2000.11.1
(VOL.23 No.11)





▲ 学校も浸水し7月から休校している

▼ ボートで集まってきた人々をボートの上で診療



AMDA

国際協力
Journal

2000
11月号

◇
CONTENTS



カンボジア・メコン河大洪水
陸の孤島となった村



カンボジア・メコン河大洪水緊急救援報告	2
ホンジュラス報告	6
NGO 相談員とは	8
スタディツアーに参加して	
ケニア報告	11
ミャンマー報告	14
ネパール報告	16
人	18
AMDA 支部だより	19
AMDA 会員及び関係者のみなさまへ	20
寄付者一覧	23
事務局便り	24



表紙の写真

カンボジア・メコン河大洪水緊急救援活動

AMDA カンボジア支部より、「メコン河流域に降り続いた集中豪雨による被害は9月26日現在、被災者160万人、35万世帯が家を失ない、死者180名に達した。現地では食料の不足とコレラ・デング熱の蔓延が懸念される」との情報が届きました。

その情報を受けて9月28日、AMDAは多国籍緊急救援医療チームをカンボジアに派遣し、ボートによる巡回診療を実施しました。

AMDA 会員ネットワーク 参加者募集

AMDAでは目下ネットワークシステムの再構築を進めています。この一貫としてアドレスをお持ちの会員の皆様には下記ネットに是非ご参加下さるようご案内します。

1. <amda-jnet@amda.or.jp>
AMDA会員とのインターフェイス機能を目的とし、AMDAの動きをリアルタイムでお知らせできます。
(AMDA速報・イベント案内・人材募集)
2. <amda-trans@amda.or.jp>
翻訳依頼 (AMDA速報・AMDAホームページ等の英訳/和訳)

ご希望の方は<member@amda.or.jp>まで、住所、氏名、電話、FAXに併せてお申込み下さい。 AMDA 会員情報局

*書き損じのハガキ、未使用の切手・ハガキ、各種プリペイドカード等がありましたらAMDAにお送り下さい。
*使用済テレホンカードは収集していません。
【送り先】岡山市楠津310-1 AMDA本部行
お問い合わせは、TEL 086-284-7730 FAX 086-284-8959

カンボジア・メコン河大水害緊急救援速報

7月よりメコン河流域に降り続いた集中豪雨による被災者救援のため、AMDAは多国籍緊急医療チームを9月28日にカンボジアへ派遣しました。以下、現地から届いた速報です。

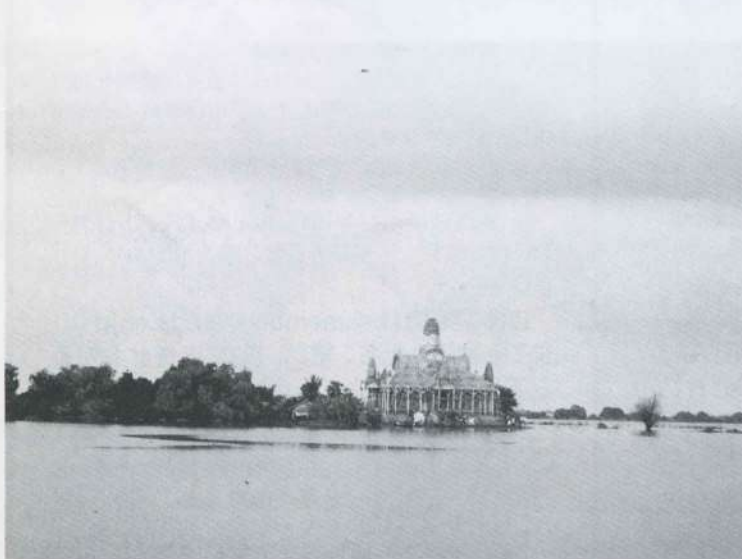
緊急救援医療チーム

■ 9月28日

日本より上田明彦医師が、AMDA ミャンマーより山本より子看護婦・大森佳世調整員がバンコクにて、合流。



ライフジャケットを着てボートで巡回診療するAMDA緊急救援医療チーム



やや高台にあるバゴダに人々は避難している

■ 9月29日

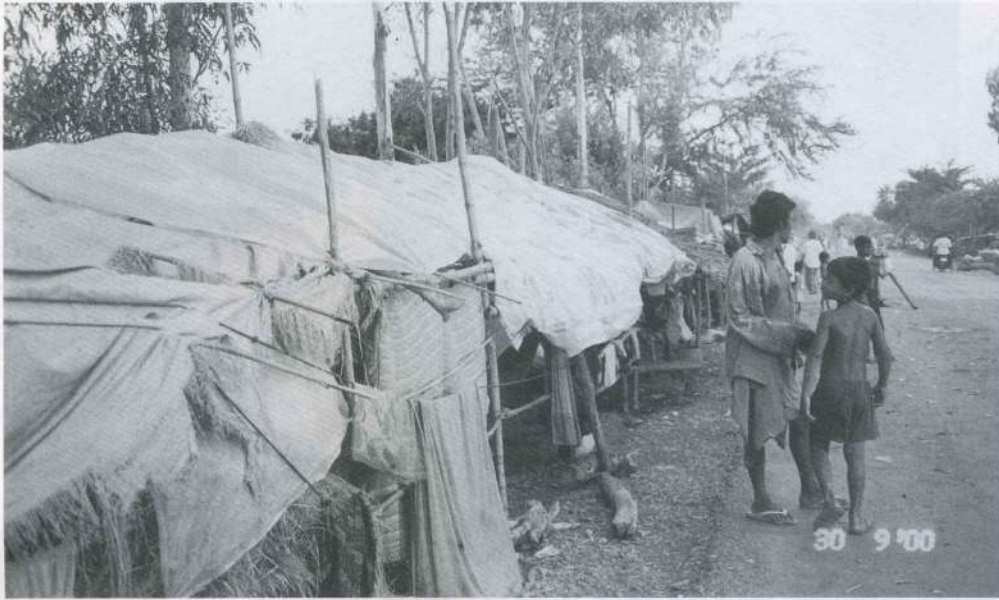
プノンペンに到着。AMDAカンボジア支部代表で今回の緊急救援リーダーである Sieng Rithy 医師 他11名のカンボジアチーム (Chun Lyhort 医師、Cheav Bunnarith 医師、Long Viseth 医師、Chea Kim Long 医師、Ben Pov Kannitha 薬剤師、Srou Dany 看護婦、Chhim Thavy 看護婦、Ou Kim Seng 看護婦、Chea Soara ロジスティック・オフィサー、Moeung Sambo 運転手、Pech Neang アシスタント) としてカナダからの William Grut 医師と合流。

ミャンマーで調達した薬品・医療器材を提供、現地の状況説明を受ける。

食料不足、コレラ・デング熱などの感染症が懸念され、9月20日の時点でカンボジア国内で被害状況がひどい地域は、Kandal 県 (死者41名、約42万7800人に被害、6万9500人が避難)、Prey Veng 県 (死者26名、約41万7500人に被害、1万6400人が避難)、Kampong Cham 県 (死者44名、約27万5300人に被害) などであったとのこと。

協議の上、AMDA緊急救援医療チームは10月2日～4日までプノンペン事務所を拠点にKandal (カンダール) 県で、5日～9日まではPrey Veng のホテルを拠点にPrey Veng (プレイベン) 県でボートによる巡回診療等の医療活動を展開することとした。同時に、2日から始まる巡回診療を被災者に広報したり、診療のための最終準備を行った。

メコン河流域のダル村出身のファルブンさん (31) は20日ほど前に家が浸水し、夫と5人の子どもと共に国道5号沿いに避難してきた。国道をはさんで両側が浸水しており、かろうじて堤防の役割を果たしている国道と、あたりよりやや高い場所に建立されているパ



両側が浸かってしまい堤防の役割を果たす国道沿いに人々は仮設住宅を建てて避難している

ゴダだけが、唯一生活できる場所となっている。片側1車線の道路の路肩には1~2メートル四方の竹の骨組みに粗末なビニールシートを掛けただけの小さな仮の住居がズラリと並び、その一角にファルフンさんの家族7人も住んでいる。人間だけでなく、牛や豚などの家畜も水のないところへと避難してくるので、非常に混雑した状態である。人々の疲労は極限に達している。ファルフンさんは胃の痛みが治まらず、下の子どもは下痢と嘔吐が止まらない。学校は7月から閉鎖されたままである。政府から配給された3キログラムの米は、あっという間になくなってしまった。「家も何もかも失ってしまい、これまでの人生でもこんな水害は初めて。これからどうやって生きていけばいいのか…」と不安な日々は続く。そんなファルフンさんは医療チームが訪れるというニュースに頬を緩ませ歓迎してくれた。

■10月2日

70年ぶりの大洪水に見舞われたメコン河流域のカンボジアでは、被害状況の最も深刻なプレイベン県に通じる国道1号線が遮断されたままであり、各地域の被災者は国道1、5、6号沿い、並びにその地域にある寺院へと避難している。不衛生な環境下、飲み水の不足などにより、被災者には下痢、上気道炎、中耳炎、疥癬などの皮膚病、目の病気、蛇毒などのけがの他、心的障害も多く見られた。



ボートに乗って被災地を巡回診療



健康状態をチェックする上田医師とロング医師

一帯を管轄するカンダール県ポグリュリュ地区の保健担当官の情報に基づき診療場所を決定。午前中は孤立してしまったタブリム村へライフジャケットを纏ってボートで向かう。村の土地のほとんどは水面下となり、かろうじて残った土地にも犇めき合うように牛や豚がいた。高床の家に残った村人が診察を受けるためにボートで集まってくる。診療できる土地もないため、ボートの上で診療を行うこととなった。薬を受け取った村人はまたボートで戻っていった。午後は国道沿いの避難民を対象に寺院の庭を借りて診療。患者数は1日で261名となった。

■10月3日

プノンペンから国道6号線を北へ約28キロメートル。カンダール県モクカンボール地区にあるプレクダムパンヘルズセンターにて診療。国道に沿って生活する避難民の診療にあたった今日の患者数は429名となった。主な疾患は昨日同様、上気道炎、下痢、皮膚炎で、避難生活が長引いている様子がひしひしと伝わってくる。

■10月4日

国道1号線はカンボジアの首都プノンペンから東南東の方向にベトナムの首都ホーチミンまで通じている。カンボジア陸上交通の動脈である。幹線道路であると同時に、洪水の広がりをくい止める堤防の働きもあった国道が、この度の洪水によって寸断されてしまった。

プノンペンからサムロングトム村までは国道1号線を走ってたどり着けるが、道路はその先で突然途切れて、茶褐色の流れに変わる。サムロングトム村では毎

日の生活をこの洪水の水に頼るしかなく、患者の半数は下痢を訴えていた。患者数298名。

明日5日からはボートでこの先のプレイベンに渡り、9日まで診療を行う予定。

滞在先は未定。通信事情も不明。

■10月5日

早朝プノンペンを出発、文字どおり「陸の孤島」となってしまったプレイベン県へ。今日からはプレイベンをベースに孤立した村々へのボートでの巡回診療を開始する。アンロングトレ村では家と家の隙間にボートを寄せての診療となった。午後の数時間で341名の診療を行ったが、症状は呼吸器感染症や下痢に加えて孤立した生活を余儀なくさせられたことへのストレスによる不眠などの精神的疾患が目立った。ある患者は「洪水になってから、まだこの村には医者が来てくれたことはなかった。ありがとう。ありがとう。」と言ってボートで帰っていった。

■10月6日

ボートの船首にAMDAの旗を付けて今日も出発。岸から離れてしばらくすると風景は見渡す限りの茶色い水面と所々に頭を出す木々と青い空だけになる。目指すはボートで2時間のクンプールリュージェイコミュン。6つの村からなるこのコミュニティはプレイベン県の中でも被害が大きく、ボートでの便も悪く、救援が遅れている地域の一つである。ボートを接岸した場所は10メートル程の狭い土地だったが、またたく間に患者が小舟で集ってきた。患者数は387名。村人の多くは農業で生計をたてているが田畑はすべて水に沈んでしまい、収穫は絶望的である。

■ 10月7日

朝から雨模様でボートの揺れも大きい。1時間30分かけてピームミーネハイコミュンに到着。メコン河沿いのこのコミュニティは洪水の規模が拡大する以前から被害に遭っており、すでに3ヶ月間も水上の生活が続いている。長期にわたる衛生状態・食生活の悪さのため皮膚疾患が目立った。

毎日夕方になると風が強くなり波が立つので、ボートでの巡回診療は早朝に出発し、夕方にはプレイベンに到着するようにしている。



ボート上での診療

■ 10月8日

昨日同様波が高く、ボートの揺れで体調を崩すスタッフも出てくる。診療場所も十分なスペースが取れず薬局部分は船上となるため特に薬担当のスタッフは負担が大きい。

今日訪れたバクドク村は320家族が3ヶ月間、高床の家での水上生活を続けている。毎日の食事は蓄えていた米と水辺の草や睡蓮の茎などしかなく、量も限られている。尿尿はそのまま水に流し、沐浴や飲料水もまた同じ洪水の水を使うほかなく、皮膚疾患、寄生虫、下痢などは当然多くなる。女性では婦人病の症状を訴える人も多い。教育あるいは経済上の問題から煮沸することなく飲んでしまう人が多く、指導の必要を痛感した。今日の366名の診療をもって巡回診療を終了。



避難してきた牛たち

■ 10月9日

プノンペン事務所にて残務整理。

■ 10月10日 早朝、帰国。

今回の緊急救援報告は、次号で詳しく掲載予定です。

募金のお願い

AMDAでは被災者への緊急医療支援を行うため、皆様のご支援をお願いしています。

郵便振替 口座番号 01250-2-40709

口座名 AMDA

*通信欄に「メコン河大水害」と明記してください。

お問い合わせ先：AMDA会員情報局 TEL 086-284-8104

ホンジュラス便り

◇
前田あゆみ

昨年の9月は毎日夕方になると一寸先も見えなくなるほど激しいスコールが降ったものですが、今年は少し様子が違います。雨が少ないのです。昨年は頻発したテグシガルバ市内での浸水の話も聞きません。この分だと10月に集中して降ることになりそうです。

9月15日がホンジュラス独立記念日ということで、今月は独立記念月間です。セントロのParque(公園)では毎日高校生による鼓笛演奏が繰り広げられ、掲げられた国旗の下には成績優秀ということで表彰を受けた生徒が直立不動で立ちます。また正午にはすべてのラジオ局で国歌が流れます。昨年は15日の記念パレードを街頭まで見に行った私ですが、軍隊的なパレードに嫌気がさしたので、今年は五輪の入場行進の録画を家でみました。

話が飛びますが最近国会で、小中高校で始業前の聖書精読を義務化するという法律が審議されています。ここ数年Mara(マラ)と呼ばれる、未成年を含んだ若者の暴力グループの動きが活発化しており(麻薬組織とも関連があるとか)、小さいうちからの宗教教育を通じて不良の芽をつもうという考えに基づいています。しかし聖書を読むだけでなく貧困、家庭崩壊といったMaraを生み出す根本的な問題が解決されないと何もかわらないのではないかと私は思います。

さて、寄り道はこれくらいにして本題の事業報告です。

—トロヘス—

トロヘスでの保健ボランティアに対するワークショップは当初の予定通り8月をもって終了しました。最終回には、避妊方法と血圧測定の講習を行いました。

避妊に関しては、ピル、コンドーム、注射といった方法のおさらい。こういったテーマは世間一般にタブー視される傾向が残っていることもあり、普段人に聞くチャンスがなく疑問に思っていたことがたくさんあったようで、色々質問がだされました。参加者にとってはあまり触れたことのないテーマでしたが、お互いもう顔見知りということもあり、誰も躊躇することなく



血圧測定の練習をするヘルスボランティア(トロレス)

家庭訪問をシミュレートする参加者(RAA)
左がボランティア役、右が無関心な住民役



ざっくばらんに話し合えました。

血圧測定はやってみれば案外簡単で、お互いの血圧を測りあう練習を繰り返しました。講習の後には血圧測定器を11村に配布しました(AMDAが半額、村側が半額負担)。地域の健康管理に役立ててもらえることを願います。

セミナーの締めくくりとして、参加者全員に“Diploma(賞状)”を手渡し、ボランティアの中のリーダーであるGuardian de Salud(ヘルス・ガー

ドマン)とコミュニティドラッグストアの責任者には“これからがんばってください”という意味を込めて、AMDA特製Tシャツをプレゼントしました。参加者がDiplomaを受け取る際に自然と一言ずつ感想がでてきたのですが、“ワークショップに参加する機会がもてて、まずは神に、次にAMDAに感謝します”という言葉をよくの方からいただきました。また、違う村の人と知り合えて刺激になったという声も聞かれました。今後は自主的に11の村のメンバーで組織を作り、なにかしらの活動を行っていくと意気込んでいます。10月にはトロヘスを再度訪問し、コミュニティドラッグストア、血圧測定器の活用状況とあわせ、新しい組織のその後の様子を見てこようと思います。

—ラモン・アマヤ・アマドール—

ラモン・アマヤ・アマドール(以下RAA)では8月に、保健ボランティア育成セミナーの第1モジュール(全部で3モジュール)を実施しました。RAAと隣のモンテ・デ・ペンディシオン(日本語に訳すと祝福(宗教的意味)の山)から合計14名が、下痢、呼吸器系疾患、予防接種、レファレンス方法等に関する4日間の日程に参加しました。

RAAは人口約5000名、そのうち現在活動しているヘルスボランティアは4名のみです。保健省は各30戸にボランティア一人というのを理想的な基準として定めていますが、RAAでは200戸に一人という割合で非常にボランティアが少ないのです。保健ボランティアの役割は、家庭訪問(妊婦や乳幼児のチェック)、下痢用経口食塩水・コンドーム・乳幼児に対するビタミンAの配布、レファレンス、ヘルスセンター主催の予防接種・体重測定の補助と多岐にわたり、全くのボラン

ティア活動です。その代わりに、ボランティアIDカードを見せるとヘルスセンターで無料診察が受けられるという特典があります。

第1モジュール後、早速経口食塩水・コンドーム・ビタミンAと玄関先に貼るためのVoluntaria de Salud (ヘルスポランティア)と書いたミニパネルを各ボランティアに配布しました。中には普段働いているので家庭訪問の時間がない、という人もいました。そういう人には、近所の子供が下痢にかかったらすぐ手当てできるように、またコミュニティ内で既に死者もでているHIV感染の拡大を予防するため、せめて経口食塩水やコンドームの配布だけでも出来ないか、と頼んでいます。

第1モジュールを終了して1ヶ月以上たちます。少しずつボランティアの家庭訪問をして様子を見ていますが、やはり無償ということややる気のうすれている人もいます。負担に感じないように、出来る範囲で、ということや強調して、また彼女・彼たちの役割が非常にコミュニティには重要だとやる気をおこさせるようにしていかなければいけません。第2モジュールは11月の初めに、リプロダクティブヘルスについて行う予定です。

保健ボランティア育成の活動と並行して、AMDA 鎌倉クラブを初めとした、皆様の寄付金によりセメントを購入、RAAの一部で排水溝の建設も始めました。皆様のご支援に心より御礼申し上げます。

RAAはテグシガルパを囲む丘陵地帯の1画を占め、最初に移住(不法占拠でしたが、現在この問題は解決しつつあります)が始まってから7年の歴史を持っています。当初は数軒しかなかった家が徐々に増え、現在は800戸以上、今でも日に日にスラム周辺に家の数が増えていっています。初期から住んでいる住民は少しずつ蓄財して、木材とトタン屋根の家から、ブロックの家を建設し始めていますが、引越してきて間もない住民(ハリケーンミッチにより家を失いRAAに移ってきた人もいます)も含めてほとんどの住民は、バラックに住んでいます。電気は通っていますが、水道はなく給水車で運ばれてくる水を購入し炊事、洗濯等

に利用しています。電話はごく最近コミュニティにひとつできました。保健関連施設ではスペインからの支援により運営されているプライベートのクリニックがひとつあります。

雨期が本格的に始まり、スラムのあちこちで雨水がたまり蚊が大量発生しています。AMDA ホンジュラスローカルスタッフもRAAで保健ボランティア対象にセミナーを開催している際に蚊にさされ、デング熱にかかり1週間寝込んだほどです(私はRAAでは幸い“のみ”の被害にしかあっていません)。また、たまった雨水で手を洗う子供、裸足で歩きまわっている子供がいるなど、スラム内の衛生意識は非常に低いと言わざるをえません。AMDA ホンジュラスは99年11月からRAAに関わり始め、住民とミーティングを重ねるうちに、排水溝の建設がスラムの生活改善、衛生改善に欠かせないという意見が住民の中でコンセンサスとなっていきました。あるブロックでは排水溝の必要性をひしひしと感じている住民自身が組織化を始め、国際NGOや宗教団体をあたって建設資金を探し始めました。

今回、多くの方々からご寄付をいただき、スラムの一部分で排水溝の建設が開始できることになりました。対象ブロック(この件に関し住民内でのオーガナイズが一番進んでいるブロック42)の住民とミーティングを持ち、いよいよ本格的に始動開始です。ブロック42には24戸の家があります。地域住民が溝を掘り、セメントで固める等の作業を受け持ちます。測量士に対する謝礼(一軒当たり300Lps)と、セメント一袋も住民側が負担します。衛生問題以外に、豪雨により道がでこぼこになり給水車が通るブロックの中央の道が通れなくなるのも住民にとっては大問題であるとのことで、即建設作業に入ります。

限られた時間内のミーティングで、少し身の上話を聞いた人の中には二人の子供をかかえた20代後半とおぼしき若いシングルマザーがいました。彼女はコーヒー豆加工工場で清掃員をし



排水溝建設作業をするブロック住民

ており、朝7時から夕方4時まで勤務のため、朝の5時にはスラムを出て行きます。残された子供たち(10歳と6歳)が自分達で身の回りのことをするそうです。週末はたまった洗濯物を貯水池まで行って洗います。彼女は女手一つで溝を掘ることが出来ないで、人を雇って掘ってもらったそうで、かなりの金銭的負担であることは容易に想像できます。このように、それぞれの人がブロックの環境向上のために努力をしています。

ブロック42の住民が対象のミーティングでしたが、どこから聞きつけたのか42の下のブロック60に住む住民も集まりました。残念ながら現在の時点では予算不足でブロック60にまでは排水溝を広げることはできません。スラム全体など、なおさら無理です。今後も寄付を募って少しずつですが、スラムの生活改善を支援していけたら、と思っています。

10月現在、排水溝のできる道路脇はもう雨水・汚水がたまることがなくなり(裏表紙参照)、衛生状況が改善されますが、コミュニティ全体となるとまだまだ予算が足りないのが現実です。

みなさんからのご協力を改めてお願いいたします。

NGO
相談員とは
(概略)

外務省では、「国民参加型援助」を進めるにあたり、その中心をなす NGO による国民協力活動への支援を強化・拡充しています。その支援策の一貫として、平成 11 年度から「NGO 相談員制度」を創設しました。

この制度は、わが国の NGO 活動の第一線で活躍する経験と専門性が豊かな NGO 団体が「相談員」となって NGO 活動に関する様々な相談・照会事項に対し、適切な回答・アドバイスを行うというシステムです。(相談料は必要ありません)
今年度(平成 13 年 3 月末迄)相談員リストは右頁をご覧ください。

尚、「NGO 相談員制度」自体に関するお問い合わせは

事務局：財団法人国際協力推進協会 「NGO 活動環境整備支援事業事務局」

電話：03-5423-0571

*「NGO 活動環境整備支援事業」は外務省の行う事業です。

AMDA NGO 相談員



NGO 相談員 岡安 利治

AMDA は、緊急医療支援および長期医療支援事業といった医療援助だけでなく、職業訓練、衛生教育、小規模融資といった地域開発事業も実施するなど様々な分野で活動しております。創設以来 16 年間に団体に蓄積されたノウハウが今後、NGO 活動を行なう方々・実際に行なっている方々にお役に立てると思っております。お気軽に電話、ファックス、電子メール等で日頃の疑問をお問い合わせください。



NGO 相談員 鈴木 剛史

昨今 NGO への関心が高まる中、あふれるような情報がマスコミ等を通じて流れているものの、いざ実際に行動に移そうとする際は戸惑う方が多いようです。

今までにも、学生、社会人、医者・看護婦など様々な分野の方々から、海外ボランティア活動の方法から団体の運営方法にいたるまで幅広い相談を受けています。今後も、AMDA のこれまでの経験と実績に基づき適切なアドバイスを提供し、少しでも皆様の手助けができればと思います。

AMDA Soul and Medicine Program

10 月 4 日、日本を訪れていたベトナム日本友好協会の一行が AMDA を訪れました。写真は、向かって左からベトナム日本友好協会事務局長 ブウ・ティエン・ダンさん、友好協会中央評議会永久委員 ドウ・ヴァン・ダックさん、友好協会専務理事 ホアン・バン・ニャンさん、アムダ・インターナショナル理事長 菅波 茂、アムダ・インターナショナル事務局長 カーン M. ザマン、サンヨウ開発株式会社 代表取締役 大川氏です。一行は、日本ベトナム友好協会大阪府連合会 常任理事 安原氏と共に来岡し、これからの AMDA ベトナム支部と友好協会との共同活動方針について話し合いを持ちました。

アムダ・インターナショナルは今、アジアの国々で AMDA Soul and Medicine Program (ASMP) を計画しています。AMDA はよりよい明日のために、今日一日を一生懸命働くことをもっとも重視すると同時に過去からの教訓を生かすことも大切だと考えています。日本は南アジアや北東アジアの国々との間に、第二次世界大戦中に数え切れないほどの悲しい歴史を体験し、その記憶



に今もさいなまれています。AMDA Soul and Medicine Program (ASMP) は、第二次大戦中に直接、間接的に苦しんだすべての人々に敬意と弔慰を表するものです。このプログラムは合同慰霊祭と、人々の霊が眠る地域での診療所建設という 2 つの活動からなります。当初は、インドネシア、ミャンマー、パプアニューギニア、フィリピン、ベトナムにおいて各国 3 箇所ずつの診療所が建設される予定です。これらの診療所が完成すれば、その地域に現在すんでいる人々が基本的な医療サービスを受けられるようになります。ベトナムではベトナム日本友好協会の協力を得て、来年早々にも ASMP がスタートする見込みです。

平成12年度NGO相談員リスト

所在地	団体名・相談員名(副担当)	連絡先	専門・得意分野	受付可能時間	備考
関東(東京)	アフリカ日本協議会	台東区東上野1-20-6丸幸ビル3階 TEL: 03-3835-6234 FAX: 03-3834-6903 ajf_sode@earth.interg.or.jp	マニフェスト、イベント企画、NGO間ネットワーク、国際NGO活動等	火、木、金曜日 14:00~20:00	mail, Fax での照会 は常時可
	河内 伸介 (渡瀬 のり子)				
関東(東京)	(財) ケア・ジャパン	豊島区雑司が谷2-3-2 シンセビル2F TEL: 03-5950-1335 FAX: 03-5950-1375 carejpn@ny.airnet.ne.jp	マニフェスト、ファットレイトング(塚原、宮井)、広報、イベント企画、国際NGO活動、教育、住民参加型援助、農村開発等(野口、小泉)	火曜日~金曜日 10:00~12:00 14:00~16:00 事業:野口(小泉) 総務:塚原(宮井)	
	野口 千歳 (小泉、塚原、宮井)				
関東(東京)	ICA文化事業協会	世田谷区成城2-38-4-102 TEL: 03-3416-3947 FAX: 03-3416-0499 icajapan@gol.com	イベント企画、ボランティア派遣、国際NGO活動、住民参加型援助等	月曜日 火曜、水曜 木曜、金曜 土曜、日曜 15:00~19:00 13:00~19:00 10:00~15:00	事前連絡 あれば来訪可 緊急時のみ
	佐藤静代 (ウェイク・リス・ス)				
関東(東京)	シャプレーン=市民による海外協力の会	新宿区西早稲田2-3-1早稲田幸仕園内 TEL: 03-3202-7863 FAX: 03-3202-4593 info@shaplaneer.org	国際NGO活動、教育、住民参加型援助、農村開発等	火曜日~土曜日 10:00~18:00	
	定松 栄一 (長畑 誠)				
関東(東京)	NGO活動推進センター	千代田区神田錦町2-9-1 斎藤ビル5F TEL: 03-3294-5370 FAX: 03-3294-5398 nio_tadashi.yamazaki@nifty.ne.jp	マニフェスト、ファットレイトング、広報、イベント企画、NGO間ネットワーク等	月曜日~金曜日 10:30~17:30	
	山崎 唯司 (友澤 享子)				
関東(東京)	NGO活動推進センター	千代田区神田錦町2-9-1 斎藤ビル5F TEL: 03-3294-5370 FAX: 03-3294-5398 janic@jca.apc.org	財務・会計等	月曜日~金曜日 10:30~17:30	
	中村 博 (澤地 恵利子)				
関東(東京)	特定非営利活動法人 日本国際ボランティアセンター	台東区東上野1-20-6丸幸ビル6階 TEL: 03-3834-2388 FAX: 03-3835-0519 jvo@jca.apc.org michiya@jca.apc.org	マニフェスト、財務会計、ファットレイトング、広報、イベント企画、ボランティア派遣、NGO間ネットワーク、国際NGO活動、教育、緊急援助等	月曜日~金曜日 14:00~17:00	mail での 相談常時
	熊岡 路矢 (清水 俊弘)				
関東(東京)	特定非営利活動法人 ワールド・ビジョン・ジャパン	新宿区百人町1-17-8-3F TEL: 03-3367-7251 FAX: 03-3367-7652 Kazushito_Takase@worldvision.or.jp	マニフェスト、ファットレイトング、広報、イベント企画、ボランティア派遣、国際NGO活動、緊急援助、農村開発、人材育成、情報提供等	月曜日~金曜日 9:30~17:00	
	高瀬 一使徒 (池田 満豊)				
関東(東京)	特定非営利活動法人 地球の友と歩む会	千代田区富士見1-5-11 奥田ビル1F TEL: 03-3261-7855 FAX: 03-3261-9053 life@earth.email.ne.jp	イベント企画、国際NGO活動、教育、住民参加型援助等	月曜日~金曜日(祝祭日 休み) 土曜日 11:00~20:00 11:00~19:00	
	米山 敏裕 (紺野静香)				
関東(東京)	開発教育協議会	新宿区西早稲田2-3-18-73 TEL: 03-3207-9085 FAX: 03-3207-8486 secg.decc@mbb.nifty.ne.jp	広報、イベント企画、NGO間ネットワーク、教育、情報提供等	月曜日~土曜日(第2、第4土曜日) 10:00~18:00	
	湯本 浩之 (中村 絵乃)				
関東(東京)	社団法人 シャンティ国際ボランティア会	新宿区大塚31 慈母会館2.3階 TEL: 03-5360-1233 FAX: 03-5360-1220 sva.research@pap.ne.jp	国際NGO活動、教育、緊急援助等	月曜日~金曜日 10:00~18:00	
	手束耕治 (佐久間美穂)				
関東(東京)	特定非営利活動法人 アジア・パシフィックNPO活動支援の会	千代田区内幸町2-2-3日比谷ビル14F 大田昭監査法人内 ODA部内 TEL: 03-3506-2417 FAX: 03-3503-2818 事務局TEL: 03-3503-1235	マニフェスト、財務会計、ファットレイトング、NGO間ネットワーク等	月曜日~金曜日 随時	
	堀川 泰男 (高田 正隆)				
関東(東京)	特定非営利活動法人 JEN	東京都新宿区百人町2-65-57ビル14階 TEL: 03-5332-9825 FAX: 03-5332-9827	マニフェスト、NGO間ネットワーク、国際NGO活動、緊急援助等	火曜日~土曜日 13:00~17:00	
	木山 啓子 (浅川 葉子)				
中部(名古屋)	特定非営利活動法人 名古屋NGOセンター	名古屋市中村区名駅南1-20-11 NPOビル"ガ"なごや3F TEL: 052-588-3680 FAX: 052-588-3680 ngosugi@alles.or.jp	マニフェスト、財務・会計、NGO間ネットワーク等	火曜日~土曜日 13:00~17:00	
	村山 佳江 (杉本 正次)				
中部(岐阜)	特定非営利活動法人 ソムニード・サンガム	岐阜県高山市花里町1-26-25 TEL: 0577-33-4087 FAX: 0577-36-5471 info@somneed.sf21npo.gr.jp	マニフェスト、財務・会計、広報、イベント企画、国際NGO活動、住民参加型援助等	月曜日~金曜日 13:00~18:00 (事前連絡: 時間外可)	事前連絡 あれば土曜日曜可
	和田信明 (竹内ゆみ子)				
関西(大阪)	社団法人 セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン	大阪市北区菅原町11-11 大作AMビル8階 TEL: 06-6361-5695 FAX: 06-6361-5698 info@savechildren.or.jp	国際NGO活動、教育、緊急援助、農村開発、人材育成等	月曜日~土曜日 9:30~18:00	
	大島 芳雄 (鶴田 厚子)				
関西(大阪)	関西NGO協議会	大阪市北区茶屋町2-30 4階 TEL: 06-6377-5144 FAX: 06-6377-5144 knc@sun-inet.or.jp	マニフェスト、財務・会計、ファットレイトング、広報、NGO間ネットワーク、住民参加型、医療、保健衛生、農村開発、情報提供等	月曜日~金曜日 土曜日 11:00~18:00 13:00~18:00	事前連絡 あれば来訪可
	平田 哲 (榎木 恵子)				
関西(神戸)	財団法人 PHD協会	神戸市中央区元町通5-4-3 元町7-11ビル202 TEL: 078-351-4892 FAX: 078-351-4867 phd@po.hyogo-iic.ne.jp	マニフェスト、財務・会計、ファットレイトング、広報、イベント企画、NGO間ネットワーク、国際NGO活動、教育、地域産業向上、人材育成、情報提供等	月曜日~土曜日(祝日休み) 9:00~18:00	
	藤野 達也 (伊藤 公男)				
中国(岡山)	AMDA	岡山市榴津310-1 TEL: 086-284-7730 FAX: 086-284-8959 toshi@amda.or.jp	NGO間ネットワーク、国際NGO活動、医療、保健衛生、農村開発等	月曜日~金曜日 10:00~18:00	
	岡安利治 (鈴木剛史)				
九州(福岡)	NGO福岡ネットワーク	福岡市南区平和1-6-1 TEL: 092-526-9620 FAX: 092-526-9620 sumiyu@bekkoame.ne.jp	マニフェスト、財務・会計、ファットレイトング、広報、イベント企画、ボランティア派遣、NGO間ネットワーク、教育等	火曜日~土曜日 13:00~18:00	
	角 正信 (原田 君子)				
沖縄	沖縄NGO活動推進協議会	沖縄県浦添市宮城4-9-17 (沖縄JIC-内) TEL: 098-877-3344 FAX: 098-877-7572 ngo@okicolo.or.jp	マニフェスト、財務・会計、ファットレイトング、広報、イベント企画、NGO間ネットワーク、人材育成、情報提供等	月曜日~金曜日 9:00~18:00	
	山城 永盛 (上原 峰子)				



岸田 典子

はじめまして。10月より岡山のAMDA本部で働いております岸田典子です。これまで、3年ほど大阪で貿易の仕事に携わってきましたが、今回AMDAの職員として皆様のご支援のもと働ける機会を頂きとても幸せに思っています。

私が、人の、特に社会的な理由からチャンスの無い人々の役に立ちたいと思うようになったのは中学生の頃でした。中学時代私は英語が好きだったのですが、当時の英語の教科書にはマザー・テレサやマーチンルーサーキングジュニアの話が載っていました。その文章を暗記し、感銘を受けるうちに、彼らの強さにあこがれ、私もいつかは…と漠然と思うようになったのかもしれない。

その後、高校時代にアメリカに留学し一人では何も出来ない状況を体験し、人々の役に立てる国際協力の仕事に就きたいとさらに強く思うようになりました。そのため、大学では国際政治を専攻し国際社会についてより深く学びました。

AMDAで、私はコミュニティサービス局に所属しアフリカを担当しています。皆さんもそうかもしれませんが、ここで勤務するまでの私にとってアフリカは遠い国でした。しかし毎日の業務の中で現地と連絡をとる事も多く、先輩方から話を聞きアフリカを知るうちに次第に近く感じる事が出来るようになってきました。最近はややくアフリカの地図も頭に入りました。このように初歩的な事から、毎日が勉強の日々です。

現在、私のサポートしている国はケニア、ザンビア、ルワンダ、ジブチの4カ国です。例えばケニア、ルワンダ、ザンビアでは、特に女性の自立のために縫製の技術訓練やビジネスマネージメントのトレーニングをし、その後、小規模融資を行い洋品店や雑貨店の経営が出来るよう手助けする事業を皆様や郵政省のボランティア貯金の協力を得て行っており、現段階で次第に成果が現れつつあります。そのような状況を見るにつれ、アフリカは私にとり非常に身近で大切な地域となってくるように思います。

AMDAではこのような個々のプロジェクトに関わっています。プロポーザルのときには何も無かったものが、次第に形となってくるのを見て、それが現実になるよう努力し、サポートする事には非常にやりがいを感じています。金銭面からも文化の違いの面からも、すんなり計画どおりにいくプロジェクトは少ないのかもしれない。そんな中、プロジェクトが成功するためには本部での的確なサポートが不可欠だと思いますので、現地でスムーズに業務が行えるようにまずは本部で一所懸命がんばりたいと考えています。

今後、アフリカについてさらに専門的な知識を吸収し、皆様にもアフリカでのAMDAを色々知っていただけるよう努めますので、どうぞよろしくお願ひします。



佐伯 美苗

(さえき みな)

皆様、初めまして。私は十月二日より事務局配属を拝命致しました。

国際NGO職員には合衆国での生活経験や国際協力での豊かな経験をもつ方が多いのですが、AMDAも例外ではありません。ひきかえ、私は日常使用する外語が英語ではないこと、これまで主に国内での対人援助、行政オンブズ分野に身を置いていたことで、随分な異分子といえます。

従って、今後如何にしてAMDAの役に立てるか、AMDAが関わろうとする人々の役に立てるか、全くの未知数ではありますが、瑣事を疎かにすることなく着実に励みたいと思っております。具体的には活動の広報や、支部或いは協力団体の増加、またその連繫を維持強化する、ネットワークづくりに携わることを希望しています。

人間の社会文化には無限の差異の可能性があることを、同時にあらゆる人間には普遍の精神が息づくことを、即ち多様性と普遍性を追究せよと、徹底して訓練された私は、AMDAの理念はごく素直にのみこむことが出来ました。そこで、当初はそうした自分の知識やフィールドワークの経験も交えて、対象地域の特色について派遣者に知らせる業務もしたいと考えていました。こんな主食で、こんな習慣や信仰があるから、というようなことを含めてです。

今は寧ろAMDAのめざす共存共生のあり方の可能性、異文化への態度の妥当性などについて考え、意見を交わす機会をAMDAに関心を持って下さる方々ともてたらとスタッフとしてのみならず一人の人間としても願っております。

我々のように「他人の日常に入りこんでその世話をやく」ことをしたがる者は、相手を自分たちの尺度で判断しないという態度が強く求められるにも拘わらず、その最も危険な陥穽に入り込み易いと思っています。他人様の役に立ちたいという気持ちの大きさと、そのような、他者を同時代人ではなく風景のように見るまなごしの忍び込む隙とは必ず比例しますから、そのまなごしを意識しなければ、よそで何が出来るかより組織の存続が至上命題になりかねません。NGOがというより、私は、個々人が同時代の人々とどんな関係を築いてゆけるか、築くべきかを考える場としても、AMDAは意義深い存在だと考えております。

大学時代に学芸員資格課程の実習の中で、何度か当地を訪れたことがあります。朝岡山を発ち、古墳・遺跡伝いに自転車を走らせ、途中殆ど休憩もなく古墳の測量図をとるなどの実習や議論その他を繰り返しつつ夜倉敷入りするコースでしたが、発掘現場に慣れて体力には自信のある学生達にもなかなか大変な行程でした。走りながら、たしかAMDAはこの辺だな、と横目に思っていたその本部に、現在こうしておさまっているのは奇妙な感懐です。

因みに私は学芸員の経験もあり、ウチのお宝をみてほしい、というご用命がございましたら、無料出張鑑定をさせていただきます。勿論ご愛読者様特典です。

以上、誌上をもってご挨拶に代えさせていただきます。向後何卒ご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

ケニアスタディツアー参加報告

横浜市 伊藤 薫

AMDA との出会い

このツアーの報告をさせていただく前に、私がAMDAのスタディツアーに参加するに至った経過をお話します。初めてAMDAの名前を知ったのは、阪神大震災のときでした。被災地で医療ボランティアの活動をしている団体をニュースで知りました。AMDAスタッフが医療ボランティアとして被災地に入り活動をしている姿を見ているうちに、日本にこんな団体があったのだ、

という思いから、私の中でAMDAの存在がとても気になるようになりました。私は、それまであまりボランティアには興味がなく、自ら進んでボランティア活動を行うことなど考えてもいませんでした。それから私もインターネットを人並みに触るようになり、ネットでAMDAを検索し、AMDAの歴史・概要・活動内容を知り、そして迷わず今年の3月に一般会員に申し込みをしました。だからといってその

時点でAMDAが行っているボランティアの意味を十分に理解していたわけではありませんが、正直なところスタディツアーという言葉も月刊AMDA JOURNALの中で知りました。つまりボランティアについては、かなりのど素人の状態にあったわけです。そして職場の勤務状況と照らし合わせ、ケニアツアーに参加することにしました。

ケニアスタディツアーに参加して

これまでの海外旅行は観光用に整備された観光地を回り歩いていました。そのためその国の人たちが実際にどの

ような生活をしているのかということを知ることはできませんでした。今回のツアーは、ケニアに生きている人たちの実際の生活状況を見て、知る旅行なのだという思いが募るにつれ、かなり緊張した面持ちで初めてのスタディツアーに参加しました。関空からインドのボンベイを経由してナイロビへと向かったが、ナイロビ航空への乗り継ぎまでに、約12時間ボンベイ空港で待機したことも初めての経験でした。



保健衛生教育・職業訓練の為の教室

ケニアのAMDA事務所に到着し、スタッフの方からオリエンテーションを受けました。ツアースケジュール、ケニアでの滞在中の注意、治安がかなり悪化しており、引ったくり、すり窃盗などは日常の中で巻き込まれるケースがあること、わずかな道のりであっても1人での外出は危険性が高いことを説明されました。そのため昼夜の食事はすべてAMDAスタッフの方々が準備してくださり、お店まで案内していただきました。スタッフの方がケニアのツアーは食い倒れツアーですと言われていた通り、山羊肉を初め、エチオピア料理等いろいろな料理を体験することができましたが、肉料理があまり

得意でない私は少々困りました。

ケニアでのAMDAの主な活動拠点はスラム地区(キベラ)で行われており、①女性を対象とした保健衛生教育及び職業訓練とマイクロクレジット。これは18歳から35歳の女性を対象に6ヶ月を期間としミシンで洋服を教え、商売の基礎を作ってもらうように指導・支援をしているということでした。

②は学校の教科書の普及を目的として、本の修繕、再製本をしてもらう。

③家具職人を対象とした職業訓練及びマイクロクレジット。路上で商売をしている人を集め家具を作り、家具の仕上げをトレーニングし経済効果がねらえるような質の高い物を作る技術を身に付けてもらう。

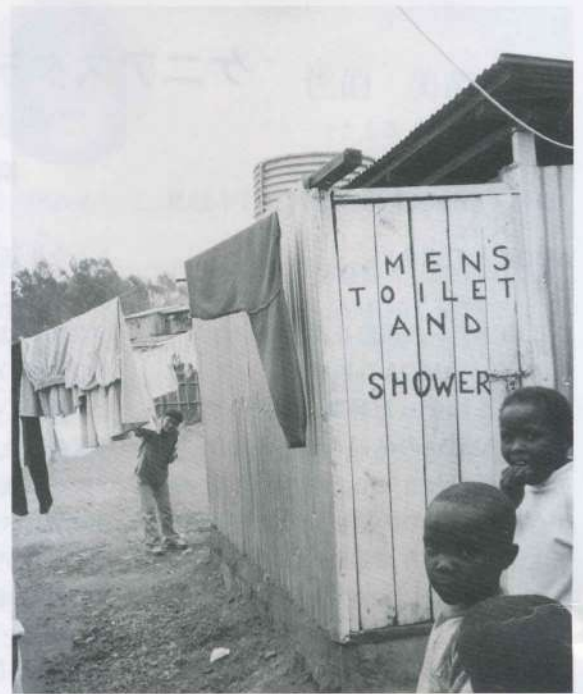
④コミュニティトイレプロジェクト、いわゆる公衆トイレを一定区間ごとに作り、区間の住民でトイレの管理

を行ってもらう。トイレと言ってもベニヤ板で四方を囲み、その中央に穴を掘ったというかなり簡易なものではあるが、し尿処理をする場所として、普及させていくことで公衆衛生の必要性を理解してもらう。また手を洗う習慣がないため手洗いの指導もしているということでした。

⑤ HIV Awareness プロジェクトは、ケニアはHIVの罹患率は40～50%と非常に高いため、予防のための教育を行っている。

以上5つの活動はいずれも、あくまでも住民が主体であり、AMDAの関わりはリーダーシップがとれる人材を発掘し、リーダーとなった人に対して、

スラム地区（キベラ）の風景
 コミュニティトイレ（右）
 トタン屋根がどこまでも広がる（下）



よりその活動がうまく行えるように指導し、方向性をつけていくことである、と詳しく説明を受けました。

これらのプロジェクトは4、50人を1グループとして行われるというのですが、終了期間までには1割の生徒しか残らないこともあり、その中で成績優秀な生徒がいたとしてもビジネスとして商売を成り立たせていける人はほんの僅かであるということでした。リーダーシップを取れる人材を発掘し、知識・技術を身に付け、個人の商売からビジネスへと広げることにより、スラムに住む人たちの経済活動を高め、生活環境を整えていけるように支援していくことがAMDAの役割だと思いましたが、まさに草の根を分けるような活動であることに一種の空しさを感じてしまいました。と同時に教育・文化レベルが低く、非常に貧困に苦しむ発展途上国においては一つの小さな芽から大事に育てていくことが必要なのだ、ということも感じました。

私にとってケニアでは旅行1日目にしてかなりのカルチャーショックを受けてしまいました。

その後、実際に初めてスラム地区に視察に行きましたが、その不衛生さは今までの想像を越えていました。住居とゴミが混在し、見たことのない数

のハエが飛び交い、スラム全体がなんともいえない異臭を放っていました。舗装などされていない道を歩くため下を見ながら、ドブに落ちないようにと緊張しながら歩きました。スラムの中では、靴屋、床屋、野菜を売る人などの中で小さなマーケットができており、スラムで住む人たちの生活のほんの一部を垣間見たようでした。また子供たちの屈託のない笑顔、他所からきたものに興味津々で近づいてくる姿に触れたとき、どこの子供たちも同じなのだと言う思いを持ちました。

何よりも驚いたことはトタン屋根がおおきな絨毯のように広がっているスラム地区の横に広大で整備されたグリーンゴルフ場や首相官邸が隣り合わせに存在しているということでした。私にはとても不思議な景色とし

て映りました。ケニアという国の貧富の差と人間が生きていくことの強さをまざまざと見たように思いました。

今回のスタディツアーでは私にとってかなり強いカルチャーショックを受けました。見るもの聞くもの全てが、驚くことばかりでした。旅行から帰って1ヶ月余りが経ちますが、未だ自分の中で、整理ができない状態です。これまであまりボランティアに興味を待たなかった私でしたが、これを機会にボランティアについて考えてみようと思います。

ケニアAMDAスタッフの皆様今回は貴重な体験をさせて頂きありがとうございました。



スラムの中のマーケット

AMDA スタディツアー（ケニア）に参加して

北海道教育大学札幌校

橋谷 陽介

私がこのスタディツアーに参加した理由は、アフリカに行きたいということ、そして、自分が大学で学んでいる国際協力の現場をみたいという二つの理由からだった。現地のスタッフの人々の温かい歓迎により、実りの多い有意義な1週間を過ごさせていただいた。

まず訪れたのはキベラだった。ケニアの首都ナイロビでは人口の多くがキベラのようなスラムに住んでいる。そこには期間中何度か訪れたが、最初に感じたことは自分が思っていたよりも状態がよいという事だ。

自分はツアーに参加する前から国際協力に関する文献を何冊か読んでいて、スラムとはとんでもない地獄のようなところを想像していた。実際に見てみると、人々には貧しいながらも活発にスラムの中で交流が見られ、物も売っているし、笑い声も

聞こえる。日本から来た我々を冷やかすような余裕も見られる。一瞬「どこに問題があるのか？」と考えてしまった。しかしキベラの中に進んでいくと、ある印象的な光景が見られた。キベラの中を通る線路が丘の上にある。その丘からはキベラが広く見渡せるのだが、反対側を見ると、なんとも優雅なゴルフ場がある。「これが貧富の差というものか」と思わず独り言を発しそうになった。もう一つ日がたつにつれて感じたことは、スラムは別にナイロビから孤立していないということだ。スラムに住む人も街中に出て定職を持つ人々がいるという事実には驚いた。実際AMDAの現地スタッフの中にもキベラに限らず、スラムに住んでいる方がいた。しかし、やはり大勢の人々は毎日日雇いの仕事を求めて町の工場へ何キロも歩いていくそうだった。

キベラの話をしたらこれだけで感想

が終わってしまいそうなので、次の話に移りたい。ツアー期間中に、女性に対してのマイクロクレジットについて熱心に現地スタッフの方々に説明していただいたが、それについてはAMDAジャーナルの10月号に記載されていたので、ここではあえてそれに触れないことにして、我々が実際に参加させていただいた（させられた？）クリーニングキャンペーンの感想を述べたい。このキャンペーンはスタッフの方々と、マイクロプロジェクトの前段階としてミシンの訓練などを受けている



女性達、それから我々参加者で行なった。内容はキベラに沿ってある道路のわきのごみをかき出して、トラックでもっと大きなごみ捨て場に運ぶというものであるが、この作業の率直な感想は「すさまじかった」と言うしかないだろう。かき出してもかき出しても出てくるごみ、ごみの中を動き回る見たことのない虫、わずかにくすぶったごみから出る煙、また、ごみをトラックに積み上げる際に失敗して上から降ってくるごみ…別にこのキャンペーンを批判するつもりはないが、とにかく最初にこのキャンペーンをはじめた方の勇気をたたえたい。スタッフの方の話によれば、このキャンペーンによる清掃効果はほとんどないという。少しばかりきれいにしたところで、またそこに捨てればよいと思うからそうだ。しかしスタッフの方はそれでそこにごみが集められ、他に広がるのを防げる

とおっしゃっていた。あるいは「それでも何人かが、ごみに関して捨て場を決めるなどの意識を持って、取り組んでいってくれば」ともおっしゃっていた。この辺にNGOが「いつかはなくなるのが理想」という理由を感じることができた。彼らの住む場所の問題なのだから、いつかは彼らの力で解決していかねばならない問題である。とにかくすごい体験であったが、このときによく現地の人々と交流を持てた気がした。ともに汗を流した2時間、その一部始終を見ていたが、それ

を通して、学んだことは大きく、よい経験だったと今思えば言いきれる。

スタッフの方が、100%の援助はなく、ベストを目指せば援助漬けにしてしまうと言っていたことに私は共感した。ベストよりもベターを目指す。AMDAの支援は受け手にとってつらいものだと思う。かなりの努力が

必要だからである。しかも必ず成功する保障はない。しかし必ず成功する保障のある成長などどこにもないだろう。先進国とて同じ事である。途上国に住む人々を貧しいからといって甘やかさず、相応の努力を要求するAMDAの方法は正しいと思う。もし100%の援助をしてしまったら、彼らは過保護に育てられた子どもようになってしまおう。援助とは頑張ろうとする人にチャンスを与えることであるとおっしゃっていた。本当に頑張るべきなのはAMDAではなく、AMDAの力を借りる人である。これはこれから自分の大学での研究に大いに参考になる考え方であった。

最後に、藤井さん、石原さん、林さん、それからジョンさんとムワンギさん、興味深いお話をいろいろとありがとうございました。

ミャンマー・スタディツアーに参加して

梅田麻希

スタディツアー参加!

夏休みの計画をあれこれ思案していたものの、結局話がまとまらないまま夏休みまであと1ヶ月を切ってしまいました。このままではせっかくの夏休みがふて寝に終わってしまう、と焦りが頂点に達した時、「そうだ、スタディツアーへ行こう!」そう決意しました。というのも、スタディツアーであれば、何らかの形でそこに住む人たちの生活を垣間見たり、そこに関わることができるのではないかと考えたからです。これまでの旅行を通し、「世界の表情は多種多様で、どこへ行こうがそれぞれに美しい。その美しさを深い感動にまで変化させたのは、その土地の人々との出会いである」そんなことを感じていたため、一步踏みこんだ旅がしたかったのです。スタディツアーへの参加を決意した後はすべてがあっという間でした。私の夏休みにぴったりと収まるのが、AMDAのミャンマースタディツアーだったからです。「ミャンマー…スー・チーさん…どこだっけ?」正直なところ、慌てて地図を広げ、旅行書を買ひ、「ビルマの竖琴」を読んだのでした。

メッティーラでのNGOフィールド体験

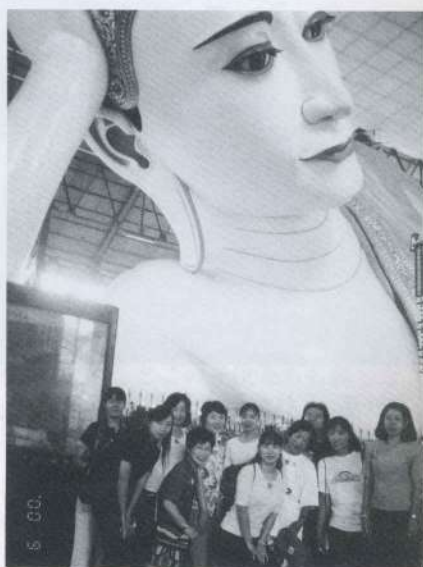
参加したのは計14名。そこには、日本から同行した添乗員さんや、メッティーラ病院子ども病棟を訪れた小児科の先生・看護婦さんも含まれます。参加者の背景や年齢、目的は様々で、医療関係者ばかりではありません。各々が縁あってミャンマーに呼び寄せられて来ました。

9月3日から9日までの一週間の行程のうち、メッティーラにあるAMDAでのフィールド体験は2日間です。「マジズ村とアレイワ村での巡回診療・栄養給食プログラム、メッティーラ病院子ども病棟、浄水プロジェクト、AMDAクリニック、セウ僧院学校の視察。その合間をぬって、パゴダ(寺院)の



あちらこちらのパゴダへ行く

マジズ村へ牛車で向かう



見学やマイクロクレジット(小規模融資)プロジェクトの説明を受ける。」このようなハードなスケジュールのためか、移動中のバスの中では大きな揺れにも関わらず、ほぼすべてのメンバーが眠りの世界へ落ちていきました。

二つの村の巡回診療・栄養給食プログラムには、多くの人たちが集まっていました。診察をして薬を出したり、無料で食事を配るだけではなく、その機会を利用して工夫をこらした保健衛生教育を行っていました。それは、地域の健康状態を底上げし、健康行動を根付かせていくためには不可欠なことです。また、薬代の自己負担が不可能

な人には、AMDAがストックしているお金の中で負担したり、給食プログラムの対象となる低栄養状態の子どもたちを近隣の村々から見つけだしてくるという活動方法を知り、少ない費用の中で最大の効果をあげるための工夫がなされているのだと感心しました。

子ども病棟への支援としては、建設にあたっての資金的な援助だけでなく、日本での研修を通じてスタッフへの技術的支援を行うなど、医療を切り口としたNGOのもつ力を存分に発揮しています。電力供給の不安定さやスタッフの不足は、病院の運営にとって大きな障害となり得ますが、地域の中核病院として多くの人々に安心感を与えていることと思います。今後は、太陽発電などを利用して安定した電力供給が可能となり、病棟のもつ機能や設備が十分に発揮できることが望まれます。また、看護職への理解が深まり、看護を志す人々が増えるよう、国家的な取り組みがなされるべきなのではないかと感じました。その際、メッティーラの子どもの病棟が医療職研修等を担い、地域医療に貢献する日が来るやもしれません。

僧院学校(学費無料)やマイクロプロジェクトでの活動は、AMDAの姿勢をよく表わしているように思います。保健と言うものは、決して単一領域だ

けで成立するものでありません。経済的・社会的背景の影響をとて強く受けるからです。子どもの教育や女性の経済力育成は、長期的に必ず健康レベルの全体的な向上につながると確信しています。そうでありながらも、AMDAは闇雲に活動の幅を広げるのではなく、教育や経済的自立の支援を通して保健衛生状態が向上することを目指しています。その明確な目的意識に、自らのアイデンティティを貫く強さを感じました。

私ひとりでは、AMDAミャンマーの活動の実際や魅力を充分にお伝えできずとても残念ですが、今後続々とお手元に届くAMDAジャーナルで活動への理解を深めていただきたいと思います。そして皆さんにもメッティーラを訪れていただけたらと願ってやみません。

この旅を通して感じたこと

この旅では、たくさんワクワクしました。村へ向かうときには、ジープや牛車に乗りこみました。また、パゴダや伝統的な人形劇を通じ、ミャンマーの豊かな文化に触れることもできました。また、お腹を壊すのではないかと心配していた料理も、「気づけばおかわり」、そんな自分に驚きもしました。そして何よりも、嬉しかったのは人々の笑顔です。私の笑顔筋はすっかり筋肉痛でした。国際理解という言葉には、実態の掴みにくい印象があります。しかしそれは決して大げさなことではなく、その国を楽しむことで自然に相手に対する関心や理解、思いやりが生まれるのではないのでしょうか。

私のきっかけは「夏休みにふて寝は嫌！」でした。ミャンマーのことにはとても疎く、AMDAに入会したのもこの旅行がきっかけです。はじめの一步がどんなに些細なことであっても、ミャンマーに出会い、そしてミャンマーが大好きになったことはとても大きな収穫です。この旅行からもらった元気とやる気で、これから自分は何をしたのか、何ができるのか考えています。多くのことを感じさせてくれた、ミャンマーのみなさん、参加者のみなさん、そして貴重な機会を提供してくださった関係者の方々、本当にありがとうございました。楽しかったです！



ミャンマー子ども病院（メッティーラ小児病棟）

ミャンマーへのスタディツアー

◇
岡山済生会総合病院小児科
井上 英雄

AMDAのスタディツアーでミャンマーへ行きました。主な目的はメッティーラの小児病棟の視察です。当初はあまり気乗りのしない思いでありましたが、実は大変心動かされる意義深い経験をさせていただきました。有り難うございました。

この旅でよその国を知り、わが国の現状を改めて認識し、「人の生きざま」さえも考える機会を持つことが出来ました。

ミャンマーは豊かな国ではありません。むしろ貧しい多くの人たちがいます。しかし彼らは黙々と生きております。医療も決して十分には行き届いてはおりません。

そんな中で私どもの病院で研修をされたキンタンシン先生は、メッティーラの小児病棟でおそらく最も貧しい子どもたちのために、その職員と共に献身的な努力をされております。朝となく夜となく、時間を刻んで、本当に「こまねずみ」のような働きであります。あの小さな体のどこにそのようなエネルギーがあるのかと思われれます。その姿は、たとえばあまりよくな

いかも知りませんが、「ため池に浮かぶ水蓮の花」のように思われました。

夜、パゴダを訪れました。光に照らされたブツ像の前で、熱心に祈りを捧げられる姿に心を打たれ、その源の一端を見た思いでありました。彼女は日本を知っております。そして彼女の国の現状を見つめております。国を思い、子どもを思う心であります。

AMDAの巡回診療に同行して「アイレワ村」を訪れました。道なき道を車で1時間。最も貧しい村の一つとすることでした。病める人の診療、乳児検診、栄養指導、衛生教育等々とてもわが国では見られない光景に出会い、AMDAおよびその職員の厳しくも尊い働きの一端を伺い知ることが出来ました。

村には子どもがあふれています。健康な子どもの屈託のない笑顔と瞳は、どこの国でも輝いています。救われる思いがします。

ミャンマーは国土は広く、街には人と活力があります。特別に子どもたちの前途に健康と夢と希望の灯がともる日を願いながらあとにしました。

井上医師は、ミャンマー子ども病院スタッフ医療技術向上のための研修の岡山済生会病院での受け入れに、大変ご尽力くださっております。研修生をはじめAMDAスタッフ一同感謝しています。

ネパール スタディツアーに参加して

栄養士 桜井 利早

看護婦 久保智恵子

ネパールってどんな国?と考えた時、私達の多くは栄養失調の子供たちの姿を思い浮かべていました。テレビの報道番組で見たことのある、骨と皮だけの痩せている子供や、栄養のバランスが悪くて、おなかの出ている子供たちの姿です。しかし、実際は…。

あと10分くらいでそろそろカトマンズに到着という時、窓から下を覗いてみると何だかとても懐かしい風景が広がっていました。緑豊かな山々が点在し、その裾野にもまた青々とした田園が広がり、茶色いレンガ造りの家々が立ち並び村を形成していました。とても自然で、気持ちが休まる心地がしました。

空港へ到着後、私達は市内を車で移動しホテルに向かいました。ネパールの首都カトマンズはとても都会で、車やバイクが後を断たないくらいに走り、活気に満ち溢れていました。もう既に外は暗くなっていて、はっきりと町の様子は見えませんが、あまり信号がない為か、多くの車が「隙あらばいざ」とあちらこちらから割り込んで来て、平気で対向車線を逆走する始末。その車の間を縫うように人々が道を渡っていきます。そしてけたたましいクラクションがひっきりなしに鳴っています。しかし、それがかえって細かいことを気にしない感情丸出しの人間臭さというのか、まさに生きているという証明のような人間の体温、熱気を感じさせてくれ、日本では得られないような感覚が沸き起こってきて、これからのさまざまな出会いにワクワクしてきました。

さて、翌朝私達は子ども病院のある

ブトワール市から25キロ離れたパイワラに飛行機で移動しました。まず国連開発計画(UNDP)のルパンデヒ郡を統括するフィールド事務所に案内して頂き、担当職員の方から参加型地域開発事業について詳しい説明を受けました。自分達の英語力のなさを非常に情けなく思いましたが、神経を集中させ、できる限り理解したいという気持ちで臨みました。実際に事業を進めていらっしゃる方の生の声をお伺いで



ネパール子ども病院スタッフ達と

きたことはとても貴重な経験でした。

その後、開発事業の対象となっているタル族のゴンゴリア村にも案内して頂きました。ドキュメンタリー番組などのテレビ画面から受ける一方的な印象とは異なり、実際に自分の目で直接見聞きし、感じたものをまるごと自分のものとするのができたと感じました。しかし同時に、村の中に存在する貧富の差も感じずにはいられません。3階建ての大きな石造りの家があったかと思うと、次に見える家は今にも倒れそうな手作りの小さな家なのです。そして、その小さな家々に、たくさんの子供達が住んでいました。その景色を見ながらふと思ったのは、子供達がみんな元気だということとし

た。ネパールのこのあたりの地域は農業が盛んで、食料に困り飢えてしまうようなことはないそうです。子供達の元気な姿を見て嬉しく感じたことを覚えています。村の奥へ奥へと進んでいっても、小さな家々、多くの子供達、そして多くの牛や水牛達、この景色は変わりませんでした。

ゴンゴリア村には、女性グループ(もちろん男性グループや男女混合グループもあります)

がいくつかあり、彼女達は週に一回程度集まり、グループリーダーを中心にさまざまな活動について話し合いをしているそうです。彼女達の表情は明るく、とても前向きな姿勢が印象的でした。そして彼女達自身の力で貯金をして、それを活用しながら生活レベルを向上させ、結果として村を発展させていくというプロ

ジェクトが取り入れられていました。実際この村では、過去数年間で百万円近い資金が集まり、農業や飲料水確保、あるいは小規模の経済活動を支援するために使われたそうです。「村」と言っても5千人くらいの人達が住む大きな居住区ですが、プロジェクトの導入によって人々の生活が少しずつ豊かになっていく姿を見て、プロジェクトスタッフもそうですが、グループを構成する彼(女)らの凄さを感じました。

翌朝にもう一つ別の村へ行きました。ドゥドゥラクチャ村と言って、以前AMDAの医学生インターンの方達が、保健衛生の調査を行っていたと聞きました。AMDAでは現在、ルパンデヒ郡においてUNDPや、いろいろな

写真上：ビデオによる家族計画指導
(ドゥドゥラクチャ村)
写真下：ゴンゴリア村にて

市民団体と協力しながら、保健衛生教育プロジェクトを始めているのですが、その中で、家族計画協会というNGOには、韓国版の海外青年協力隊であるKOCVから看護婦さんが派遣されていて、家族計画の指導も行われていました。ネパールでは一般にまだ女性の地位が低い為、その意識改革・向上を図ることを目的として、AMDAがユニセフから提供を受けたビデオを活用しながら啓発活動も行なわれており、その日はたくさんの人々が集まってきて熱心にビデオを見ていました。このような地道な活動の積み重ねに敬服すると共に、人々が少しずつでも理解をしていってくれることを切に願いました。

さて最後になりますが、プトワール子ども病院では、院内を案内して頂いた後、現地医師の方達に入院患者の病状説明を受けたり、診察を見学させていただいたりしました。その中で、いろいろ考えさせられる場面もありました。日本脳炎や寄生虫といった、日本ではもうあまり聞かれない病気が多いのです。そして感染症の多さにも驚きました。日本脳炎は予防接種で防げますが、多くの貧しい人達はワクチンが高く買えないそうです。ここでも貧富の差という厳しい現実に触れざるを得ませんでした。

そしてもう一つ、特に心に深く刻み込まれたできごとがありました。それは出産に立ち会えたことです。大変な難産で、途中見ていられなくなったりもしましたが、その分赤ちゃんが無事生まれた時には「生命」の神秘と尊さを強烈に感じました。同時に、このような難産であった場合、病院で適切な処置を行っていなければ、赤ちゃんが無事に生まれていたら、そして母親も無事であったかは疑問です。ネパールの現状として、乳児死亡率が非常に高いことが言われていますが、このよう



に子ども病院で出産したお蔭で無事生まれたというケースは、今のところごく稀な恵まれたことだという現実を忘れてはいけませんし、この子ども病院の果たしている役割についてももっとたくさんの人々に知ってもらいたいという気持ちを強くしました。また、病院スタッフの皆さんが、忙しい中であっても患者さんに対して、ちゃんと顔を見ながら丁寧に対応されている様子を見て、日本の医療現場ではいつの間になおざりにされていた最も大切な事を見出した思いがしました。

今回のスタディツアーでは、もっともっとよく知りたい、そして自分には何ができるだろうか？と真剣に考える機会を与えていただきました。この貴重な経験を大切に、今後活かしていきたいと思っています。最後になり

ましたが、本当にお忙しい中、私達の為に時間を割いてくださいました子ども病院のスタッフの皆様に感謝申し上げますと共に、これからもこのような活動がますます広がっていくことを願って止みません。

2000年夏の AMDAスタディツアーでは

ジブチ、ケニア、ネパール、カンボジア、ミャンマーでの5カ国のNGOフィールド体験ツアーを実施できました。現地のAMDAスタッフも参加者の皆さんが満足して下さるよういろいろと工夫しながらご案内しています。スタディツアー報告をご覧になって興味をお持ちになった皆さん、次回のスタディツアーに参加なさってみてください。

人

10

AMDA インターナショナル名誉顧問紹介

Dr. Khan M. Zaman

AMDA インターナショナル事務局長



AMDA インターナショナルは AMDA の名誉顧問をお願いしている方々をシリーズで紹介している。今回はその第 10 回目として駐日ボリビア大使 H.E. Mr. Eudoro Galindo-Anze と駐日ネパール大使 H.E. Mr. Kedar Bhakta Mathema の二人の大使を紹介する。

H.E. Mr. Eudoro Galindo-Anze

駐日ボリビア大使

H.E. Mr. Eudoro Galindo-Anze は 1997 年 12 月に駐日ボリビア大使に就任。1943 年生まれ。略歴は下記の通り：

学歴

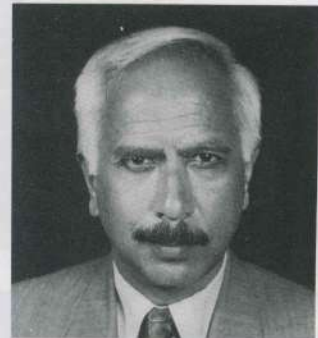
- 1964 年 テキサス農工大学卒業（経営学士）
- 1965 年 ハーバード大学マーケティング国際研究所卒業（修士）

職歴

- 1964-65 年 ガリンド・コンサルタント会社創立
- 1966-68 年 ボリビア産業生産センター（市場調査サブコンサルタント）
- 1968-70 年 靴下会社 Calceteria Nacional S.A. 副取締役
- 1971-73 年 投資会社 Inversiones Generales S.A. 取締役
- 1975-77 年 コチャバンバ県スポーツ機材委員会委員長
- 1974-79 年 自転車会社 CALOI 社長
- 1979-86 年 民族民主行動党（ADN）創設に参加。副党首
- 1979-85 年 下院議員（ADN）
- 1985 年 副大統領候補（ADN）として出馬
- 1987 年 ADN 離党。ボリビア民主党（PDB）結成
- 1989-93 年 上院議員（PDB）
- 1993-97 年 下院議員（PDB）
- 1997 年 6 月 大統領候補（PDB）として出馬
- 1997 年 12 月 駐日ボリビア大使に就任
- 1998 年 10 月 （日本在住）ニュージーランド大使・タイ大使（兼任）

著作

政治、歴史、時事問題などについて多数の著作を新聞、雑誌、定期刊行物で発表している。
その他にも、6冊の本を出版している。



H.E. Mr. Kedar Bhakta Mathema

駐日ネパール大使

H.E. Mr. Kedar Bhakta Mathema は 1996 年 11 月に駐日ネパール大使に就任。1945 年生まれ。略歴は下記の通り：

学歴

- 1966 年 トリブバン大学修士号取得（文学）
- 1969 年 英国エディンバラ大学修士課程修了

職歴

- 1967-74 年 トリブバン大学教育学部講師
- 1974-76 年 トリブバン大学中央キャンパス部長
- 1976-91 年 世界銀行ネパール支局業務担当
- 1991-95 年 トリブバン大学副学長
- 1995 年 世界銀行及びスイス開発公社コンサルタント
- 1996 年 青年・スポーツ・文化省青年問題評議会委員長
- 1996 年 11 月 駐日ネパール大使に就任

趣味

絵画、音楽鑑賞、自然鑑賞

9 月度 医療通訳養成講座の報告

9 月度の医療通訳養成講座が、9 月 30 日、横浜市の伊勢崎クリニックで行われた。講師は、当クリニックの原田慶堂院長。テーマは、産婦人科について。

原田院長は、専門を更に深めた研究をするため、人生に悔いを残したくないからと、45 歳で渡米。4 年間カウンセリングの勉強をした。一番やりたいのは、更年期障害と心の病についてだが、風俗店が多い土地柄、エイズや性病の検査に訪れる患者の方が多のが現状と話す。

伊勢崎クリニックには、産婦人科と心療内科があり、臨床心理士によるカウンセリングにも力を入れている。カウンセリングルームには、院長の希望で、部屋ごとに違う色の壁紙とブラインドがあり、とてもきれいなクリニックだ。付近に外国人が多く、現在までに 33 カ国の患者が訪れた。受付には英語の問診表も用意している。日本人と違う点は、薬をもらう時に、詳しい説明を求めること。

1. 膣洗浄器

膣内の温度は約 40℃。特に生理の時は、清潔にしないと菌が繁殖しやすい。クリニックでは、子宮内膜炎の予防のため、院長が開発した膣洗浄器の使用を薦めている。これで膣内を洗浄し清潔を保つことで、膀胱炎、おりもの、かゆみ、ただれ等を防ぎ、性感症も予防することができる。

2. 生理

女性で貧血の人は、経血の量が多いことが原因の場合が

多い。生理痛のひどい人は、市販の鎮痛剤を呑むだけではなく、診察を受けるべき。生理痛、生理前緊張症、生理不順に、ホルモン療法が効果的。

3. 更年期障害

卵巣の働きが低下し、女性ホルモンが急激に減少することと、その時期の心因的ストレスとによって、心身に様々な症状があらわれる。主な症状としては、のぼせ、ほてり、発汗、冷え、動悸、肩凝り、腰痛、めまい、頭痛、イライラ、不眠、うつ状態など。

4. ホルモン補充療法

Hormone Replacement Therapy (HRT)。更年期障害の治療法で、卵巣から分泌される卵胞ホルモン(エストロゲン)が、減少することによっておきる症状を、エストロゲンを補うことでやわらげようとするもの。貼り薬と飲み薬がある。欧米では、40 歳以上の女性の約 30%が行っており、アメリカの病院では、子宮、卵巣の手術をした患者には必ず、医師が HRT についての説明をする。日本では薬の副作用を気にするあまり、0.5%しか普及していない。

5. 医療通訳をする方へ

良い通訳をするために重要なのは、医療に関する正しい知識。このような場を活かし、常に知識を深めるよう努力して欲しい。

平成 12 年 11 月 医療通訳養成講座 受講生募集のお知らせ

◇
AMDA 神奈川支部代表 小林 米幸

来る 11 月より再び来年 9 月まで毎月一回のペースで医療通訳養成講座を開催いたします。毎回、各分野の専門家に「やさしい日本語で」専門分野や専門用語について講義をいただきます。受講者の資格はとくにありませんが、日常会話程度の何らかの外国語が話すことができれば結構です。単に興味があるだけという方も歓迎いたします。なお 10 月は都合によりお休みいたします。

11 月テーマ タイ人患者のケア、文化と考え方

担当 心光スリパウン看護婦 (AMDA 国際医療情報センタータイ人エイズプロジェクト担当)
日本語で行います。

日時 11 月 12 日 (日) 午後 1 時より 3 時

場所 小林国際クリニック (小田急江ノ島線鶴間駅下車徒歩 3 分) TEL 046-263-1380

参加費 500 円

小林国際クリニック FAX 046-263-0919 (連絡先を記載してください)

TEL 046-263-1380

* 水曜日、日・祭日は休診です。

平素より AMDA の国際公益事業に対し、ご支援を賜り幸甚に存じます。
現在、AMDA は 2001 年からの特定非営利活動法人としての法人運営を実現すべくその移行期の状況にあります。これは、あくまで日本における国内法人の制度であり、多国籍医師団を中心とする AMDA は Local Initiative (現地主導型) の尊重をモットーとしているため、日本的な理屈だけでは海外チャプターからのコンセンサスは得られにくい場面もあるのが現状です。

また、これまでのボランティアにウエイトを置いた従来の事業と併せて、国際協力の民間専門機関として、国内外の各機関の委託事業を積極的に受注し、より専門性の高い事業分野に進出を図り、事業基盤の安定の確立につなげたいと努力を続けております。当該分野には、範とすべき国内団体もなく、まさに AMDA がその先駆けとならんと、日本政府をはじめ世界銀行等のご指導ご協力のもと、組織整備に精進しております。

AMDA グループ

- ・ アムダ インターナショナル (緊急救援、海外の地域保健医療活動等)
- ・ AMDA 国際医療情報センター (在日外国人への保健医療情報の提供及び相談等)
- ・ アムダ国際福祉事業団 (国際理解教育への参画、国際福祉ボランティアの養成事業等)
- ・ アムダ国内防災機構(仮称) (国内防災活動及び災害救援活動)

従来の AMDA をその事業分野別に 3 つの特定非営利活動法人に分掌し、既に独立した組織としてスタートしている AMDA 国際医療情報センターを含むこれら 4 法人をもって AMDA グループとする。このグループ内の協議については、必要に応じて 4 法人の代表者により討議される。

会員また関係者の皆様には、2001 年国際ボランティア年にむけて、ますます AMDA へのご支援ご協力を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

AMDA

代表理事 菅波 茂

平成 11 年度会計決算報告

貸借対照表

平成12年3月31日現在

(単位:円)

(資産の部)		(負債の部)	
科目	金額	科目	金額
I. 流動資産	87,803,552	I. 流動負債	50,181,111
現金	446,889	短期借入金	30,000,000
普通預金	24,230,499	未払金	10,410,679
外貨現預金	19,163,566	職員預り金	407,261
郵便貯金	7,076,743	その他預り金	9,363,171
未収入金	31,530,601		
有価証券	499,800	II. 引当金	7,197,062
商品	817,125	プロジェクト引当金	7,197,062
短期貸付金	20,000		
立替金	13,546		
仮払金	4,004,783	負債合計	57,378,173
		(資本の部)	
II 固定資産		II. 正味財産	35,832,920
(1)有形固定資産	5,407,541	(うち当期正味財産	(52,654,706)
車輛運搬具	500,000	減少額)	
器具備品	8,247,427		
減価償却累計額	(3,339,886)		
(2)投資等	0	正味財産合計	35,832,920
保証金	0		
資産合計	93,211,093	負債及び正味財産合計	93,211,093

収支計算書

自平成11年4月1日

至平成12年3月31日

(単位:円)

科目	金額
I 収入の部	324,858,211
年会費	14,268,000
補助金	77,956,018
助成金	73,762,480
寄付金	154,895,732
販売収入	1,315,129
広告収入	1,713,250
雑収入	748,714
受取利息	198,888
収入合計	324,858,211

科目	金額
II 支出の部	
渡航費	47,503,253
現地活動費	161,249,743
現地派遣手当	13,816,544
現地雇用費	4,294,416
人件費	35,145,978
福利厚生費	3,547,443
保険料	3,588,017
輸送費	632,141
車輛費	3,966,544
通信費	12,640,227
医療費	49,681,186
備品費	946,862
事務用消耗品費	2,169,543
記録費	621,498
会議費	4,033,151
図書購読料	109,581
旅費交通費	7,107,485
水道光熱費	132,356
業務委託費	5,653,041
印刷費	6,201,570
貸借料	4,232,719
修繕費	300,010
広告料	176,115
支払会費	261,120
租税公課	65,200
減価償却費	2,081,656
減価償却廃棄損	3,625,447
雑費	3,441,884
支払利息	288,187
支出合計	377,512,917
当期正味財産減少額	52,654,706

監査報告書

1. 監査の方法の概要

私たちは、AMDAの平成11年度(平成11年4月1日から平成12年3月31日まで)の貸借対照表及び収支計算書について監査した。

2. 監査の結果

監査の結果、上記貸借対照表及び収支計算書は、一般に公正妥当と認められる会計の基準に継続的に準拠して作成されており、AMDAの平成12年3月31日現在の財産の状況及び同日をもって終了する年度の収入及び支出を適正に表示しているものと認める。

以上

平成12年6月28日

会計監事 田辺 稔

会計監事 藤井 勢輔

会計監事 渡見 弘之

AMDA 高校生会ホームページ開設!

<http://www.amda.or.jp./highschool/index.htm>

5月くらいから作ろうと話していたホームページ。ずっと先延ばしにしてしまい、とうとう8月が来てしまいました。目標は8月中旬に完成させ9月1日に開設すること。

しかしいざ始めてみると困難なことばかりでした。そこで事務局の人と相談して、中学校の技術の赤木先生にアドバイスをもらうことにしました。人に見てもらうためにはどのような文章・タイトルが良いかなど考えなければならないことは山程あるのに、お盆休みや部活などでAMDAへ行ける時間がない。しかし夏休みもあと1週間。宿題の追い込みとともに、ホームページも追い込みをかけていかなければなりません。気持ちはあせるけれど思うように進まず、休みの日にAMDAに来て7時間ちかくパソコンとにらめっこしたこともありました。

そしてようやく、まだ完成ではないけれど、今の形にたどりつくことができました。9月1日にホームページが開設できたという達成感が、困難を楽しかったという思いにしてくれました。

この今のホームページがどのように変わっていくか見ていてください。ご協力くださった皆さんに感謝します。

三宅ちか子

AMDA Internet Station

AMDA高校生会ホームページ

AMDA高校生会とは?

AMDA高校生会は1995年の秋に発足した高校生のボランティアグループです。現在は約20人の高校1年生、2年生で活動しています。学校などはみんなばらばらですが、心一つにがんばっています。

普段は毎週火・金曜日の学校終了後にAMDA本部(岡山市橋津)に集まり活動計画を立てたり、AMDAのプロジェクト担当者からAMDAの活動の話などを聞く勉強会をしたりしています。また、AMDA事務局の手伝いもさせてもらっています。部活などで忙しかったりする人が多く、全員が集まるのが難しいので、月に1回土曜日に集会を開き、そこで行事の話などをして、計画がみんなにきちんと伝わるようにしています。

AMDAが海外で行っているプロジェクトの中から私たちが支援できるようなプロジェクトを1つ選び、支援しています。その支援に必要な資金を集めるために、街頭募金や地球行事への参加、テレビやラジオへの出演などをして、忙しくがんばっています。

より多くの人にAMDA高校生会を知ってもらうために、ホームページを設立、チラシ作りや、作文を書いたりもしています。

その他、私たちにできそうなことはできるだけやるように努力しています。

プロジェクト

1. 雲南省小学校再建プロジェクト
2. ネパール障害児学校建設プロジェクト
3. チャンパック小学校再建プロジェクト

ご意見・ご要望はe-mail: teens@amda.or.jp (AMDA高校生会)まで

「ホテル医二十五年」

岩本 淳著 (帝国クリニック院長)

B6判 252頁
1800円(税別)
日本評論社
2000年5月25日刊

著者の岩本先生には「青淵」に度々ご寄稿いただき、電話で何度かお話を伺うこともあったが、直接お会いしたのはごく最近のことである。何せ旧制一高一東大医学部一東大病院第一内科医局一ハーバード大学留学という経歴となれば、初対面の当方としては身構えてしまう。だが、それは杞憂であった。おおらかで飾り気のない人柄に、つい引きこまれてしまう。この印象はどこから来るのだろうか? 本書には著者の人となりの理解に役立つような事例が随所に出てくる。

著者は東京・牛込生まれの江戸っ子。小・中学は、小原国芳の玉川学園にて「労作教育」(一日の糧は自分で耕せ)や自学、合唱、体操など、自主性尊重の教育を体験され、その後、旧制一高に進んで戦況悪化の混乱の中、「絶対無償の精神」を学ばれた。そうしたことを自分のものとし、その個性に磨きをかけられたことが著者の生き方の基盤となり、その人柄に滲み出ているのであろう。研究者の道を歩まずに、父祖ゆずりの開業医を選ばれ、しかもわが国でも初めてというホテル医の道に進まれたのも、このような精神形成の然らしめるところと思われ

人間・岩本の中では、知・徳・対の三つが見事に融合している。少年時代より育まれた多彩な才能は、多忙な医療の世界に身を置くようになってますます輝きを増している。中でも音楽に対する情熱には圧倒されるものがあり、またスポーツへの取り組みにも目をみはらせる。

本書では、1975年帝国ホテルの中に「帝国クリニック」を開業以来、出会った人々との数々のエピソード、更にはボランティアの草分けといえるような、絶対無償の精神に根ざした幅広い活動——高食事に始まり全米日本人留学生会などを経てAMDAに至るまでが語られている。特にAMDAについては、旧ユーゴ、メキシコ、インド、バングラデシュなどの活動が詳しく書かれ、最後には著者は、AMDAに余生を捧げる決意の程を述べておられる。

心身ともにまだ若い75歳のヤンチャ精神に乾杯!是非ご一読をお勧めしたい。(「青淵」編集部)

月刊誌「青淵」より転載



事務局便り

10月6日午後1時30分頃、『鳥取県西部地震』が発生しました。事務局のある岡山市でも震度5弱を記録しました。震源地である鳥取県西部地方を中心に日を追って被害が広がり、9県で8日現在、負傷者125名、建物損壊5,268棟、2,200人が避難所で生活、と報道されました。被災地の皆様にお見舞い申し上げます。



AMDA 国際貢献大学校開設

AMDAは2001年9月に岡山県哲多町の協力を得て、国際貢献大学校を開校する運びとなりました。

この施設は国際協力活動に携わる国内外の調整員等を養成する目的で、AMDAは用地を検討していましたが、哲多町より建物（来春廃校予定の町立小学校校舎）、用地の提供を受けることとなりました。

10月2日、国際貢献大学校の準備機関であるアマダ国際福祉事業団事務所を哲多町に開設し、開校準備を開始しました。

芳明小学校で国際協力勉強会

岡山市立芳明小学校での国際協力の勉強会にAMDA高校生会が出席し、AMDAや高校生会の活動について、また各自のボランティア観について小学生に話をしました。小学生達は大変興味をしてくれ、特に高校生会が支援しているカンボジアについてのクイズは大盛り上がりでした。勉強会に出席した高校生会のメンバーはこうした勉強会を機会に開発途上国での人々の過酷な暮らしや国際協力活動の必要性について子ども達が少しでも知識をもってくれるようになれば良いなと感想を述べていました。

●ミャンマー便り●

ご 結 婚

AMDA 大森佳世さん * JICA 横森健治さん

AMDA ミャンマープロジェクト駐在代表 JICA ミャンマー企画調整員

2000年10月12日 ミャンマー雨安居（うあんご）
明けの祭り
首都ヤンゴン PANSEA ホテル

ミャンマーでのお仕事を通じて出会い、助け合いながら愛を育んでこられたお2人。

2年間のご活躍を示すかのように150人近くものゲストが、当地をはじめ日本や中国から祝福に駆け付けました。来年からはお2人揃って、AMDAケニアに赴任予定で、今後ますます公私にわたる見事な2人3脚ぶりを見せてくれることでしょう。おめでとうございます。どうぞお幸せに！



AMDA Journal に関するお問い合わせは、AMDA 会員情報局 TEL 086-284-8104 まで

*ご入会、会費、ご寄付、その他ご購入のための振込は、本誌綴じ込みの郵便振替用紙をご使用下さい。連絡欄に振込目的を明記して下さい。

*クレジットカード（全日信販のAMDAカード）での会費納入方法もあります。AMDAカードについてのお問い合わせは、全日信販株式会社 本社営業部 086-227-7161です。

AMDA ホームページ
<http://www.amda.or.jp>

あなたから、AMDAへ
AMDAから、世界へ
あなたの愛をお届けします。



Photo: 鈴木 邦弘 ソマリア難民キャンプにて

AMDA
アムダ

ボランティア定期預金



中国銀行

あなたたちのちからを
必要とする人たちがいます

AMDA募金箱を置いていただける方はご連絡下さい（TEL 086-284-7730）

